

幼児の人間関係と保育者のかかわり

— いざこざで起こった泣きの事例から —

柴坂寿子
(大学教員)

幼稚園や保育園での集団生活では、子ども
の間でさまざまないざこざが起こる。保育者
は人間関係を形成する機会としていざこざを
とらえ、多様な状況を考慮に入れながらいざ
こざにかかわる。いざこざ^争の中では子どもが
泣く場合もある。これはいざこざに泣き加
わったさらに複雑な事態である。本稿では、
いざこざの中で泣き起きた時に保育者がど
のように子どもにかかわるのかを、幼稚園の
一年間の観察から検討する。フィールドは二
年保育年少（四歳児）クラス、担任保育者は
三十代で十一年以上の経験者である。

分析の対象は、いざこざの中の泣き事例
31事例である。31事例中、保育者がかかわつ
たのは27事例であった。保育者がかかわつた
27事例において、保育者自身が泣きに気付い
た場合が最も多く18事例、当事者以外の子ど
もが保育者に知らせた場合が5事例、泣いた
子どもを当事者以外の子どもが保育者の所に
連れてきた場合が2事例、泣いた子どもが自
分で保育者に訴えに来た場合が1事例、その
他1事例だった。このように、泣き事例のほ
とんどに保育者がかかわると考えられる。泣
きに気付くきっかけとしては保育者自身と

もに当事者以外の子どもが重要と考えられる。泣きは目立つ出来事であり、緊急事態を知らせる合図として保育者・周りの子どももの注意を引きつけると言えよう。

以下では担任保育者の対処の事例を検討する。双方から話を聞いて状況を明らかにし、いざこざにおいて非がある子どもにその内容を認識させて謝罪させ、その子ども事情も受けとめて対応することが基本に思われた。

〈事例1〉 二月。たけしの「やめてよ！」と言う声。たけしが泣いている。紙で作った剣を持ったけんが横に立っている。保育者が近づき、けん「何で泣かしちゃったの？」と聞く。数人が近づいてきて様子を見る。けんは剣を柵に差し込んでみせ、「おさむ君がね、もらっていいよって言ったから」と説明するが、おさむはその場にはいない。けんの説明と同時に、たけしが泣きながら柵を指して何か説明する。保育者がたけしに「取ったの？

たけし君のやつを？」と聞く。「もらっていいよっておさむ君が言って、たけし君の取っちゃうの、おかしいじゃない」と言って、保育者はけんから剣を取り上げる。けんは「だつてさ」とさらに説明しようとする。保育者は「たけし君はいやだつて言ってるんだから」と、けんを説得する。けんは剣を取り返そうとするが保育者は渡さず、「だつてさ、じゃない」と、けんの顔を見ながら少し厳しく言う。保育者が自分で剣を作るよう言う。けんは「できないんだよ」と答える。けんは実際手先が器用ではない。保育者は「そうか」と納得し、できないなら作ってあげるからと優しくけんを諭し、謝るよう促す。

けんは保育者が最初少し厳しく対応したのは、このころ、けんが非を認めない態度を繰り返し、それをけんの個人的な課題ととらえていたためと思われる。その後、今回特有の

事情を受けとめ、対応したと考えられる。

いざござは保育者が当事者と一緒に遊んでいても起こるが、いざござが泣きに至る場合は、多くが保育者がいない時なのだろう。そのため、泣きが起こると保育者は状況把握から始めると考えられる。31事例で当事者以外の子どものかかわりを確認したところ、ほとんどの場合、泣いた子どもにのみ状況を探っていた。保育者の特徴は、泣いた子ども泣かせた子どもの双方に状況を探ねる点にあると思われる。泣きへの共感や援助は重要であるが、いざござの原因は別の問題である。保育者は問題を明確にした上で、いざござを本質的に解決しようとすると考えられる。状況要因を十分考慮した対処は、経験ある保育者の特徴とされる。

次の事例では、双方に話を聞いて状況を明確にし、誤解だったことを当事者ばかりでなく、泣かせた子どもを責めていた周りの子ども

にも明確にしている。当事者にはいざござにならないための別の対処を示唆している。その上で、楽しい雰囲気をつくるようかかわっている。

〈事例2〉 十二月。一斉活動で縄跳びをした後、自由に練習する。縄を使い「さめさめごっこ(鬼ごっこの変形)」をする子どももいた。ゆりあが「えりちゃんにぶたれた」と泣く。ゆりあはゆりあを保育者の所に連れていく。保育者はゆりあに状況を聞くが、聞き取れない。保育者はえりに近づき、状況を聞く。周りを数人の子どもが囲む。ゆりあを泣かせたことをりなに責められ、えりも泣いている。保育者はえりに「うなの？」と聞くが、えりは頭を横に振るだけである。保育者がまたゆりあに状況を聞くと、ゆりあは泣きながら説明する。保育者はその説明を繰り返し、ゆりあに確認する。保育者はえりに「えりちゃんをさめさめごっこのお魚に間違えて捕まえちゃつ

「たんだって」と説明し、謝るようにゆりあを促す。ゆりあはしゃくりながらうなづく。保育者はえりの肩に手を置き、「あなたはね、私（さめさめごっこは）やってないの、って言うのよ。捕まえられてびっくりしたの？

縄跳びしてたんだよね」と確認する。えりはうなづく。ゆりが「ぶたないで言葉で言えば」と言うと、保育者は「そう。ぶたないで、私は今縄跳びしてるのよ、って言うのよ」とえりに繰り返し、ゆりに向かって「二人とも思ってたことと違っちゃったんだもんね」と確認する。ゆりはうなづく。保育者はえりの胸に丸を描きながら「お腹の中で考えてたこと見えなかったから。お口で言うんだよ」とえりとゆりあに交互に確かめる。二人ともうなづく。保育者がゆりあを指し、謝るようえりを促し、えりは泣き顔で「ごめんなさい」と謝る。ゆりあもうなづく。保育者は「仲直り」とリズミカルに言い、笑う。りなも笑顔にな

る。ゆりもリズミカルに「アイラブユーで仲直り！」と言い、二人の手を取って「仲直り！よし！」と握手させる。えりも笑顔になる。保育者はゆりあに縄跳びを渡し、「えりちゃんは今、縄跳びを一生懸命練習してるからね。もう夢中になってるから」と再度えりの行動を説明する。

31事例での当事者以外の子どもは泣きへのかかわりを見ると、泣いた子どもに同情的で、泣かせた子どもに非があるとする傾向があった（同様の傾向は Landreth 1941^{※2}）。そこで保育者は、いざこざの背景や原因、経緯を周りの子どもにも明示し、泣きにのみ左右されるのではなく、問題の本質を理解させようとすると思われる。そして周りの子どもも含め、強い感情を伴う出来事から気持ちを切り替え、遊びに戻れるよう配慮するのだろう。

一方で、泣きが個人的な課題である子ども

に対しては違った対処も見られた。入園当初、泣きの多かったしおりに対しては、泣く以外の選択肢を示唆するかわりが見られた（同様の対処は小原他 2008^{注1}、Landreth 1941^{注2}）。

〔事例3〕 六月。ままごとの赤ちゃんをやるよう、ゆりがしおりを誘う。しおりは「どうして赤ちゃん赤ちゃんて言うの？ 赤ちゃんなんて」と怒る。ぺつたりと座って頭を垂れ、たしおりをゆりがなで「泣かないで」となだめ、赤ちゃんになるといいことがあると説得する。しおりが「わーん」と泣き声を上げ、ゆりはあわてて「お姉さんにしてあげるから」となだめる。保育者は離れたところから「しおりちゃん、泣いてないで、私はこうしたい、って言いなさい」と促す。ゆりがなりた役を聞くが、しおりは答えない。ゆりは「もうエプロン（大人役の衣装）ないしねえ」と困る。エプロンが見つかり、ゆりはしおりに着せる。

泣きは注目を集める出来事であり、保育者の対処は当事者だけでなく周りの子どもにも入る。中島は、保育者の泣きへの対処が変わると子ども泣きへの対処も変わること示唆した。いざこざで起こる泣きへの保育者のかかわりは、人間関係に関するメッセージが子どもに伝わる重要な契機なのだろう。

参考文献

- 1 小原俊郎・入江礼子・白石敏行・友定啓子「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか—保育者の経験年数・トラブルが生じる状況による分析を中心に—」乳幼児教育学研究 17 pp.93-103 二〇〇八年
- 2 Landreth, C. (1941) Factors associated with crying in young children in the nursery school and the home. Child Development 12: pp.81-97.
- 3 中島寿子「幼稚園児の友だちの泣きへの対応」聖ヶ丘教育福祉専門学校紀要 17 pp.53-67 一九九七年